とかち新聞
主筆 松山明
(行所)北海道足寄郡足寄町 とかち新聞社 電話⑥2551番
(毎旬5の日発行) 1カ月500円 1カ年前納の場合3,000円

矢野氏が決意を表明

本別町長選へ

五月の本別町長選へ向つて立起を表明していた本別町農業共済組合総務の矢野幸雄氏の後援会結成大会は五日午後一時十五分から、第一会場の神社会館の一、二階大広間に六百七十名、第二会場の本別国民グランドホテルに五百三十名（主催者発表）の会員があつまつてひらきました。

水元氏が四選不出馬を確約

はじめに後援会設立準備委員長の荒木文造氏から経過報告として

『五十三年の新春はわが町本別の新しい世代の幕あけで、昨年九月の半ば、水元後援会長の石山先生にお会いして現職町長の四選出馬があるかどうかお尋ねした石山先生は率直な方で自分の意見を述べられ、水元氏の四選出馬はあり得ない、本人もそういつているし、また無投票で出た方は争つて出るべきでない、それにもまして大切なことは本人の健康のことである、新聞の発表によるとハツキリと病名がしるされているが、三年の時間を必要とするし出るべきでもなく出すべきでない、と申された、そのことがあつてから私ども青年同志は次期町長選への後援計画をひらき、あらゆる角度から人選し、若きと希望に燃える、いつでもだれとでもどこでも話をまじえて話しあえる矢野幸雄氏を推薦することに決つた、そのことを具体化するために矢野氏の上司であり共済組合長の高木副議長に理解と協力を求めたが、高木さんはそれは待てと、石山先生だけの話しでことをすすめるよりも現職町長の意志をきいてすすめなければ混乱をおこすおそれがある、自分がいつて町長の意志をきいてくるからそれまで動きを待てといわれ、十月初旬に高木さんは、水元町長は私は出ない、矢野が出るというならそれでいいだろうといつたので金を押してきいてきた、矢野を推薦したいといつてきている青年達に返事をするまで待たしてあるのでもう一度本人にお願いしたい、町長が四選に出るというなら矢野にやめれといわねばならないし、ききたい、町長が四選に出るというなら矢野にやめれといわねばならないし、やれといわなければならないし、水元さんは出ないのですかといえばそうだという、それなら矢野陣営に一生懸命にやれといつていいんですね、と念を押したらお前達一生懸命やれと（拍手）ご返事を頂いた、私はさつそく青年同志にそのとおり伝えたし、農作業の収穫がおわつてから総出で農協会をひらくことを通知した、が、どうしたことか十一月下旬になつて突然に現職が四選に出ることになり、所派争うことになり非常に残念である、しかし私どもは青年矢野をかついで議員選挙を推進し今日の集会をめざして努力してきた』

との報告があつて、議長団に小坂勝雄氏ら七氏を推して会則を決定、役員選出は選考委員をあげて

△顧問　野田永造、前田熊次、山下敬一、三木和雄、長谷川義信、青木久雄、和田元八、朝来冨治

△会長　荒木文造

△副会長　高木幸ほか十名

△幹事長　作間勝雄

△副幹事長　荒木又造ら二十名

△青年部長　前田昌男

△会計部長　平賀浪雄

△事務局長　佐藤敏吉

などの各氏を決定して、役員を代表して富陽会長から『七十才に達したが、最後の情熱をふりしぼつて職責を尽うしたい』と力強いあいさつがあつて、激励のことばにうつり、高木幸農業共済組合長から『矢野氏は十勝農業学校、帯広畜産大学を出て二十五から二十八年間にわたつて共済組合にあつて金田一の組合として農林大臣表彰をうける中心的役割を果し、このたび辞表を出し誠一貫で乗り出した』戸井博之帯大助役代表から『矢野君は大学のラグビー選手で明るい性格の男らしい人』小坂義久農場代表から『大馬柱の矢野幸車に出られて淋しいが最元の部にかけて頑きたい』後援会を代表して作間勝雄氏から『一千名以上の関町いらいのあつまりで、快男児ということばどおりの男が矢野さんで重に固つた人がいれば頼んでいつてともに泣いてくれる矢野さん、酒に笑う人があれば頼んでいつてともに歌い踊る矢野さん、年が五十才まさに働きざかり、町政批判を私はしないがただ残念に思うことはウソのない町政がほしい（拍手）時に臨んでおのれの座を維持せんがために、おのれの権力を保持せんがためにまたそれをとりまく人達が自分の利権を擁護せんがために、そのような後援会であつてはならない、ある後援会ではいつている二月には矢野後援会をぶつつぶす、三月には井出後援会をぶつつぶすといつているが金や権力では矢野後援会は絶対つぶれない』などの発言があつました。

豊かなふるとづくりを

つづいて矢野幸雄氏の決意表明にうつり『多くの町長さんとともに私の父もあるときは米を背負つて陳情に、あるときは小豆を背負つて陳情に、そのようなことを記憶している、そういうなかから本別町の上水道ができ、各大橋の永久橋への架橋がなされ逐次本別町の体勢がととのつた、しかしこれはモノがないのでモノをのみ追求した町政ではなかつたか、過去十二年間の水元さんの町政は立派な仕事をされているが、モノのみ追求する姿にかわりがない、一人のすばらしい為政者が立派な仕事をされることは時間だが一方陽のあたらない場所が出てくる、私は昔つてその場所に陽をあてたい、私がその仕事をやろうと敢えて立候補を決意した、私の考え方は明るく公平な町づくり、愛情ある心豊かな町づくり、アイデアによる創造的な町づくりが政治理念で、その五つの柱は

一、あなたのための町政を推し進め豊かなふるさとをつくる

二、酪農、畑作、林業と商工観光を振興し町民の生活安定と町経済の充実を図る

三、心豊かな人づくりのための教育と文化の向上に努める

四、町民の福祉を進め明るく住みよい町をつくる

五、町民の声を聞き心の通う行政を進める』

と述べました。

とのあと会場の婦人二十数名から矢野夫妻に花束や一輪花の贈呈があり、宣誓決議があつて浜田文雄氏の音頭で後援会の万才を三唱して、午後三時十分に閉会しました。

ニュースを斬る

中道勢力とは！

◆…警察予備隊という名前で発足したのは日本に軍隊をおくことができない平和憲法があるための苦肉の策であつたわけで、アメリカの朝鮮戦争に備えての戦時でもあつたわけで、それがいつのまにか保安隊となり、そしてこれが自衛隊となつているこんにも、これが軍隊ではないと言い張るのはムリなはなしで、この既成事実を認めようとしている公明党などのいわゆる中道勢力は、中道ではなく第二保守党への道を歩みつつあります。

◆…資本主義国第二の経済大国といわれる成長にりは、なんと[illegible]も朝鮮戦争とベイナ[illegible]で、経済大国は必然的に軍事大国に向わざるを得ない筈で、教育予算や福祉予算はそつちのけにして、一機六十一億円もする戦斗機を購入しようということでもわかるように、歯止めのない軍事予算をチヨツプするのは中道勢力ではなく革新勢力でなければなりません。

◆…釧路市長選がそうであつたように、自民党候補が自民かくしで登場すればこれに残びつくのが中道勢力で、その口実は共産党とはともに天を戴かないという排除の論理で、政経癒着の警察国家、軍国主義政治は反共を旗印にして日本を破滅に導いたように、これはいつかきた道で、共産党が加わる選挙なら自民党を勝たした方がよいというのが中道勢力のハラであるとすれば、偽装革新ということになります。

千春一家がテレビに

友人の結婚披露宴に出席のため、十九日に足寄町へ帰つてきた千春には、東京から週刊「女性自身」の記者とカメラマンが密着取材で同行、そのあとから札幌テレビ（STV）の一行が到着して、ともに二日間にわたつて松山一家の生活ぶりをカメラとマイクでとらえました。

一家団らんのなかでもライトの焦点は千春とオイの光星（八カ月）とのかからみ合いで、接客アナウンサーと父母との対談も入り、屋外では千春が幼少のころ遊んだところや、足寄駅から千春が出発する風景まで撮映しました。

これらは三月二十三日の「二時ワイドショー」で放送される予定です。

（木にもたれて）

（ベンチ姿）

（成竹田デイレクターの前で）

（札幌中島公園で）

（STVでサイン）

（本紙の復写、転載を禁じています）